山と博物館

第28巻 第5号 1983年5月25日 大町山岳博物館

猿倉より白馬岳　撮影　古幡和敬

私の好きな山

・山博とセンター、大町公園の高台に建つこの二つの施設は市立、県立の違いはあれ、登山や自然に関して共通面の多い仕事をしている。そのためか、県内外から大町を訪れる人々には一つの施設に映るらしい。参観や電話等両者を混同するケースによく出会う。これはこれで結構ではないか。二つで一つ。更に連携を強化していき、全国でも稀な両施設の一層の進展を願うものである。

当所のある受講生が、山博の印象を次のように記している。「さすが我国随一と言われるだけのことはある。テーマ別の展示はいくら時間をかけても見飽きることのない、すばらしい内容だしファイル式の説明はアイデア商品だ。登山体験コーナーも山博らしいイキな企画と感心する。展示室からの眺めも素晴らしい。雪をいただいた後立山連峯が白い屏風のように続く姿はまさに絵である」と。

講習会終了後のお土産としてこんな見学ができるのもお隣りに山博があればこそ。

・好きな山　青山学院大の学生が卒論の一環として昭和57年8月に槍沢と横尾にて、百十人の登山者に直接「あなたの好きな山は?」と尋ねた結果を当所へ寄せてきた。それによると、①穂高連峯、②槍ケ岳、③剣岳、④白馬岳、⑤富士山、北岳、⑥八ケ岳…と続く。人気のある山は知名度もさることながら、鋭角的かつ男性的な山容で遠くから見てもすぐ分かる山が多い、と彼は分析する一方、ローカル色の濃いその登山者特有の登り慣れた好きな山があることにも着目している。

・私の好きな山　これが今回与えられたテーマである。熟考五日余り、未だ解答となる固有名詞が見つからない。かつて四季折々にピークハンターした後立山は無論のこと、槍、穂高、南ア、みんないい。自分にとって未知なる東北や越後の山にも心魅かれる。よって今は好きな山・登りたい山を特定しかねている次第である。（山岳総合センター福与邦夫）

遠去かりて大いなる峯あり
―古い山の人、中村清太郎のこと―

中村　涼三

Ⅰ

中村清太郎は明治21年、日本橋の呉服屋の一人息子として生れました。長ずるに従い商家の生活を嫌い、自然を好み山に魅せられて、やがて「山」を一生の課題とする決心を固めます。親の期待に背き、家業を捨てたのです。

明治という時代は、あらゆる分野で急激な「近代化」が推進された時期です。西欧伝来のやり方によってです。山の世界も例外ではありません。明治20年代に英人ウェストンは槍ケ岳に登り「日本アルプス」を内外に紹介します。少し遅れて小島烏水、木暮理太郎等が高山にわけ入ります。いわゆる日本アルプス探険時代の幕あけです。

中学生の頃から高山をめざしていた清太郎も、三枝威之介、加賀正太郎らの山友と共に試作した国産ピッケルを握り、勇躍して山に向います。

ところで「探険」ですが、日本の高山は人跡未踏の地ではありません。昔も今も狩人は稜線に獣を追っています。古来、さまざまの理由から山に入り、高山を越えた者の数は知れません。ただその記録や経験が明らかにされていないだけでした。そうした古い山の歴史を考えれば、探険時代とはいささか烏滸の言とも思いますが、道は草木岩石に埋まり、満足な地図もないとあっては、町育ちの者にはたしかに探険だったのです。

とにかく中村清太郎は、小島さんに導かれ、三枝、高頭、高野、茨木の山友と共に白峯から赤石山系を縦断する「探険」を実行します。明治42年、南アルプス一帯特に赤石山系は「日本高山帯の最も暗黒の領域」だった頃のことです。ついで翌年三枝、茨木と共に針ノ木の雪渓を登り立山に向う途中、高山蝶「クモマツマキチョウ」を発見し、狂喜して追います。

それらは、日本の山の古い先人たち、山岳宗教家、山人たちにしてみれば児戯に類することだったかも知れません。しかし、自分たちの生れた国の自然、その高く窮まるところを、近代の洗礼を受けた若い感受性と知識で明らかにしたいと気負い立った志は、たしかに一つの時代風潮をつくり出し、低地に息苦しく住む人々に、別世界のあることを告げたのです。（その苦心の果が、今日の山上の荒廃につながることは皮肉ですが、我国の近代化の性質を象徴して教訓的でもあります）

こうして日本の高い山々は、早くも近代都市生活の有毒に気づいた一群の人々の〝道楽〟により、あらためて開かれたのです。

50代の頃の中村清太郎　画　筆者

Ⅱ

父・中村清太郎は、ハイカラの服を着、仰々しい道具を持って山に登りましたが、自分自身を登山家とは思っていなかったようです。日本山岳会草創の頃からの一人でありながら、得意気に山頂を踏む姿は、あの人にふさわしくありません。父は山に登りましたが、それは山の核心に近ずくためにしたことではないか。さらに何のためかといえば、山中の霊気に触れ、神仏と見まがう高山の姿を写させてもらうことで、自己の心身の浄化と安心を求めるためにではないか。

父は多くの山の絵を描きましたが、晩年の作品には署名の上に「敬写」という文字をしるしたものが少なくありません。山頂に立つことよりも、山上が最も美しく、ありがたく見えるあたり、偃松帯の一角に三脚を据え、日が没するまで絵筆をつかみ、山に対している姿こそ父にふさわしいものです。それは探険に乗りだした頃の青年客気の姿ではなく、とりとめもない大きな対象を前に、思いあぐねて立ちつくす、もう若くはない男の姿です。

古代の詩人が仰ぎみて「高く貴き」と感嘆し「北に遠ざかりて白い大いなる峯あり」と記した山々、幡隆上人が合掌した山々を眼前にして、父は嬉しくもまた、苦しかったものと思われます。心中を次のように書いています。

「画は進まない。殊に肝腎の山に対しては手も足も出ない―絵なんぞ描くのは無用の事だとさえ思った」

「何を描こうとも、それは神の姿であるべきで、況や山をや・山に対すること猶古代の宗教者の如く、山を描くこと恰もその宗教画家の如くならば、何んぞ徒らに古人を羨まんや」

「そう気がつくと、実践の困難は忘れて、大道へ出たような思いがした。峻難はその登攀にあるのだ」

石井鶴三さんは、小島さんに向い、父の絵を評して次のような意味のことを述べたそうです。

「厳粛敬虔な心をもとにして生れ出た絵だ」

「絵の底を流れる一脈の力は、全く神秘というべきものだ」

中村清太郎の最後の大作は、槍ケ岳山頂下、坊主の岩小屋前に坐し、槍の背後におわす阿弥陀如来を拝する幡隆上人を描いています。

父にとって、西欧風の「探険」から発した山は、ついには神仏の具現となり、山の絵を描くことは、一生をかけての精進と信仰告白の行為であったと思われます。

断片1

父と家族揃って奥多摩あたりの山から下りてきた時のことと思います。立派な屋敷があり、入念に手入れされた大きな盆栽のような樹々が列を作っていました。感心して見入る私たちに、父は短かく、自分は感心しない旨を伝えました。今思えばその言葉が、私のものごとを見る上での重要な基準になっています。父は自然であれ人であれ、浅知恵でいじくり細工することを嫌いました。「我が生は下手な植木師らに、余りに早く手を入れられた悲しさよ……」と書いた詩人がいますが、父は上手な植木師をも好まなかったようです。

断片2

父は偶像を拝まぬ人でした。記憶にあるかぎり、あちこちの大きな鳥居や山門の前を素通りし、頭を下げることをしませんでした。自分の家の墓にすら終生参らず、仏壇の扉も自分から開こうとしない人でした。あの長い戦争中家にはついに天皇の写真は見当りませんでした。私はよその家に行っては、ご先祖の写真と並んで天皇皇后の写真が掲げられているのを見、不思議に思ったものです。

父は陛下が嫌いだとか、天皇制に反対とかいうわけではないのです。父が深い敬意をこめて語るのは古寺の仏像、古い社寺の美についてでした。それは、やはりすぐれた芸術に対する敬意の表現であったと思います。考えてみれば父があちこちの偶像を拝まなかったのは、不信や傲慢の故ではなく、他に拝すべきものを持っていたからでしょう。

断片 3

私が物心ついた頃は、すでに日中戦争のさなかでした。皇軍大勝利の旗行列や提灯行列は、今も鮮やかな記憶の一コマです。父はそのような愛国的行事にまるで背を向けていました。父は中国の歴史や文化に関心を持ち、その文物を敬愛している様子でした。中国について語り「何しろ白髪三千丈のお国柄だ」というのが口癖でした。口調には憧憬の思いがこめられていたと思います。一方「支那事変」の新聞記事に見る父の顔は、たしかに暗く険しいものを感じさせました。同じきびしい表情でも絵を描くときのきびしい顔つきとはちがい、子供心に残りました。

断片 4

しかし大平洋戦争、とりわけ緒戦の大勝利は父の心を動かしました。少しは戦争の話をするようになり、以前、中国や南方を旅した時に目撃した、植民地での白人の横暴ぶりに触れたこともあります。上海の租界の公園には「犬と中国人入るべからず」と書いてある、等々。だが、父もまた日本人が朝鮮や中国で何をしているかについては、知らなかったのか忘れていたのか、何も語りませんでした。

「次は濠洲だ」「そうにちがいない」

その会話を私は鮮明に記憶しています。多分昭和17年の春頃のことです。父と鷲鼻の加賀正太郎さんが、縁先に大きな地図を持ちだして広げていました。二人とも高揚した表情でした。中国との戦争に不快の気持をかくさなかった父は、その時はたしかに戦争を支持し、大平洋での大日本帝国の勝利を願っていました。

断片 5

父が最初の本「山岳渇仰」を世に出したのは、それから間もなくのことです。できたての本を前に父は嬉しそうでした。「こんな本を今時よく出させてくれたものだ」と。軍をはじめ、当局の言論出版に対する統制はそれは厳重であったと聞きます。戦争に役立たぬ本に割当てる紙など無い時代です。父の文章が戦意昂揚に役立つとは思えません。しかし本の中には、父のかつて遊んだ南方の地、セレベスやジャワの事が書かれていました。そうして、今その地方で戦かっている皇軍兵士を讃える一節も、たしかにあったと記憶します。父のように軍国の狂熱に最も縁遠い人間までも、時勢はそのまま取りこみ、押し流していったのだと、あらためて思うのです。

断片 6

しかし戦局の悪化は急速で、父も山行どころではなくなります。町は人や建物の疎開で騒然としていました。私は当時国民学校五年生でしたが、学校ですすめられた学童疎開に参加しようと決意しました。母は大反対でしたが、父は賛成しました。考えてみれば、その頃の私の家の庭は広く、隣接する小島さんの家の庭をはじめ、空襲を避ける空間は十分あったのです。

疎開をすすめた父の心中には、空襲だけでなく、その後に来るであろうもっと悪い事態の想像もあったにちがいありません。父は山本元師の死を「自殺のようなもの」といい、「いい時に死んだ」ともいいました。

父には、この際自分がいま行くわけにいかない山中に、末の男の子くらいは行かせておいても良い。その行先が信濃の山中であれば結構なことだ、という思いがあったのではないでしょうか。「信州はいい所だ」といって私の決意を認め、遠くを見るような目で窓外を眺めていた父の表情は忘れ難いものです。

田部重治さんの姿が白絣の着流しで、どこか不安気にアトリエに見えたのもこの頃のことです。会話の内容はわかりませんが、二人共不気嫌な表情でした。小柄で髪のうすい茨木猪之吉さんの、小さで柔和な目も記憶にあります。その茨木さんが穂高で姿を消すのもたしかこの年の秋の事と聞きます。子供心にただならぬ世の有様でした。

断片 7

敗戦は父にとっても大きな衝撃のようでした。疎開から帰った私の目に父はひとまわり小さく見えました。父はやがて肋膜炎を病み、栄養失調症もあったのでしょうか床につくようになります。インフレによる生活困難、加えて敗戦直前の混乱の中で母を亡くした哀しみもあったでしょうが、それ以外にも父を苦しめるものがあったはずです。

疎開から帰って間もなく、たしか小春日和の庭先で私は何気なく父の言葉を耳にしました。話し相手は小島さんではないかと思いますが判然としません。父が口にしたのは「まちがっていた」「罰があたった」というような言葉でした。病中のせいか父の顔は白く、以前の快活さは失なわれていました。言葉は人に問いかけるというより、自身にいい聞かすかのようでした。

断片 8

昭和21年の早春、父と私は当時武蔵野の一角にあった上井草球場で、六大学の野球（多分新人戦のようなもの）を見物しました。

父は野球が好きでした。見物を終え場外に出ると夕暮でした。まばらな人家と雑木林の果に、丹沢、道志、秩父と連なる山々が、長く黒く裾をひろげていました。その中央のあたりに富士が、白く高く聳えていました。

いくさに荒れた野を吹く夕の風は痛く身を切り、寒さと空腹で私は気もそぞろでした。帰宅を促そうとする私の前、畑の小道に父は立ちつくしたまま動きません。背後の私は眼中になく、父は僅かに頭を垂れて山に向い掌を合わせていました。野面を吹く風の痛さと共に、その姿は今も折にふれて私の眼前にあります。つくづく考えてみると、その姿は喜びをもって無沙汰の山に対していたというより、仁王立ちながら遥かな山に対し何事か許しを求めていたのではないかと思われる姿でした。

さいごに

父はその後健康を回復し、また山にいきだします。敗戦後まだ何年もたたぬ正月、父を前に兄や私が、一知半解の戦後風の理屈を並べたことがあります。父は気嫌よく聞き、一言いいました。「私はもっと大きな事を考えていたのだが…」。その意味を父は説明しませんでしたから小生意気な私は、内心父の負け惜みだろうと聞き流しました。それから十余年がたち、寝たきり老人になってからも、母に登山靴の用意を命じていた父は、昭和42年に死にました。

父・中村清太郎の老いさらばえた肉体は私の前から消えましたが、その言葉は絵と共に残りました。

末期の言葉「白馬の三月はいい、乗鞍の春はもっといい…」そう言いかけ、枕頭の私の顔を不思議そうに見「何が悲しいのか」と問いかけた顔と共に、今も私を捕えてやみません。上井草球場々外の薄暮に山に向って立ちつくす姿とあわせて「もっと大きな事」とは、一体なんなのか、五十近くなる小伜にはいまだ解けないのです。

一九八二年二月

秩父に近い多摩の兎小屋にて

中村清太郎の三男

山菜の季節に

清沢由之

一、はじめに―一つの知的遺産

北アルプスの山なみは、まだ冬の姿だが、湖のまわりの雪が溶け始める。昔、夏場、子供たちがカブト虫やクワガタ虫の手に入る宝のあり場所を知っていたように、湖畔のいち早くふきのとうの顔を出す場所へかけつける。それは、その年の雪の量にもよるが、三月の中ば頃からである。あの谷すじのコゴミ（クサソテツ）は、あの沢のシズクナ（モミジガサ）はと気にかかるのが桜の季節の前後であろうか。そして、少し奥のウトブキ（ヨブスマソウ、イヌドウナ）やヘイジュク（ネマガリダケ、チシマザサの竹の子）のとれる六月いっぱいあたりが、この大町、北安曇地方の山菜の時期の中心といえそうである。

現在は、山菜とか野草（料理）という言葉が使われるが、この地方では「山の青もの」と称している人もいる。本場は何といっても東北地方であろうが、本県では、雪の多い、この大北地方や、飯山地方が、山菜として伝えて来た所と言えるのではなかろうか。

一年の三分の一前後を雪と共に暮らす人々にとって、雪どけとともに芽をのぞかせる野草は、確かな春の息吹の象徴であり、中でも食用になる木の芽、草の類は、文字どおり、山の幸であり、自然の恵みそのものであったろう。また、一面では、そういうものを食べないでは生きていけなかった厳しい生活の現実もそこには存在したのであろう。

今、私の手元には随想的なものも含めて、「山菜……」と名のつく本が二十余冊、「食べられる野草」といった類のものが十五、六冊に及んでいる。それもわかり易い写真入りで。便利になったものである。しかし、食用野草の歴史をひもとけば、そこには、食用キノコの歴史に似た、長い庶民の試行の歴史があるはずである。リョウブ（俗名サルスベリ）のように、今食べるとたいしておいしくもないが、救荒食物としての側面から研究されたものもある。

こうしてみると、これは毒、これは食べられるがおいしくない―そういう祖先の知識の積み重ねが今、私たちに伝えられている。まさに知的文化財―貴重な遺産と言える。

そういう意味で山菜に接する私たちの態度はまず、そういう祖先への感謝と、あの厳冬の下では想像もつかないのに、春には必ず芽ぶいて私たちを迎えてくれる自然の偉大な神秘に感謝するところから出発しなければならないであろう。更には、単に食べるというのではなく自然を理解し、自然に対する人間のあり方、接し方をも考えるよすがとしたいものである。

二、採取に当って

日本列島改造論を初めとして、何々ブームと言われるものは、一般庶民に知識の拡大や多くの恵みももたらした反面、多くのマイナス面もさらけ出しているのが今日の実状であろう。そういう点で、山菜ブームといわれる今日、私たちも心しなければならない点がいくつかあるであろう。

1、食べられるとわかっていても自生が減っているもの少ないものは対象からはずす。

○スミレの仲間、○ランの仲間、○キキョウ、○カタクリ、○ユリの仲間、○エンレイソウ、○サワオグルマ（ウドナ）

2、その場所に群生していないものは止める。○ニリンソウ（ソバナ、コモチナ）○ソバナ、○ツリガネニンジン（トトキ）

3、全草を利用するものも、できるだけ根は残し、また、その場所の何分の一かを採取するようにする。○アサツキ、ノビルなど。

4、植物を知り、種類は多く、量は加減する。毒草を知り、若葉に注意―トリカブト。

5、採取するものは、群生しているもの、よくあるものにし、イワタバコなどは採らない。

6、タラノキなどは木を切ることは慎み、花を楽しめるものは必ず、何本か茎を残す。○アザミ、○ソバナ、○ツリガネニンジン等。

三、利用してもよいと思われるもの

○ヨモギの仲間、○西洋タンポポ（根はコーヒーにも）○ハリエンジュ（ニセアカシア）―花の天ぷら、○シロツメクサ、○ヒメジョオン、○ハナイカダ、○ウコギ、○オオバコ、○メマツヨイグサ、○ヤブカンゾウ、○ギシギシの仲間、○クサギ、○コシアブラ、○マユミ、○ミゾソバ、○ミツバウツギ、○コンフリー、○シャク、○ハリギリ（エンダラ）、○ニワトコ、○カラマツソウ、○イタチササゲ。

セイヨウタンポポ

四、山菜の今後として栽培を考えたいもの

○ユキノシタ、○クサソテツ（コゴミ）、○モミジガサ、○イヌドウナ、○ユキザサ、○ギョウジャニンニク、○ハナイカダ、○ククコ、○キクイモ、○ハンゴンソウ、○ミヤマイラクサ、○ヒメウコギ、○サンショウ、○オケラ、チョロギ（○サルナシ、○クロマメノキ、○ヤマボウシなど木の実を楽しめるもの。）この他にも、新しい野菜として考えたいものが多くあると思われる。

五、おわりに

雪どけのフキノトウの季節から、谷あいのオオヤマザクラを見つつ、足もとにイカリソウのピンクが揺れ、ウグイスの声を聞きながら山道を行く季節。芽吹きの梢のむこうに残雪の山々、若草の萌えるにおい。風光る季節。目にしみる若葉。秋のキノコと木の実。山菜は自然の恵み、贈り物である。自然との出会いを大切にし、感謝で接したい。（　　）内は主に大町、北安地方の呼び名。

（鉢盛中学校）

博物館だより

友の会自然観察会―山菜会―終る

5月22日に小熊山で開かれた春の自然観察会は会員外の参加もあって盛会のうちに終りました。

カモシカ扇沢放養園へ

例年夏季の間展示されるカモシカ2頭が5月末扇沢カモシカ園へ移動しました。

山と博物館第28巻第5号
一九八三年五月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）